

S.R.ランガナタンのレファレンス・サービス観について

—その特質と教育的側面—

吉植 庄栄（東北大学附属図書館）

1. はじめに

本稿は、インドの図書館学者として著名である S.R.ランガナタン(Shiyali Ramamlita Ranganathan, 1892-1972)のレファレンス・サービス論について、言及がある著作を年代順に考察する。そしてレファレンスの一般的な定義と比較して彼のレファレンス・サービス論の特性を指摘することを目的とする。

ランガナタンは、図書館を「普遍教育の手段であり、あらゆる教育の道具を一堂に集め、無料で分配し、それらの助けで知識を普及する(もの)¹」と述べているように、教育と不可分なものと考えていたことは、拙稿で紹介した。² その見地からランガナタンが指摘する、レファレンス・サービス自体の教育的側面についても言及する。

2. レファレンス・サービスとは何か

最初にレファレンス・サービスの一般的な定義を整理する。

2.1. 日本国語大辞典（ジャパナレッジから）³

○レファレンス - サービス [名] (〔英〕 reference service)

図書館が行なう利用者サービスの一つで、必要とする文献や参考図書についての問い合わせに応じたり、検索に協力したりするもの。

¹ S.R. Ranganathan, *The Five Laws of Library Science*, 2nd ed., Asia Publishing House, c1963, [1957], p.354., 翻訳: S.R.ランガナタン著; 渡辺信一, 深井耀子, 渋田義行共訳『図書館学の五法則』日本図書館協会, 1981, p.331.

² 拙稿「S.R.ランガナタン『図書館学の五法則』に見られる教育の概念—図書館を人間形成の観点で見る—」『教育思想』39号, 2012, pp.97-114.

³ <http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=200204736f6e3XONkcX3> (参照 2017-11-27).

2.2. 文部科学省の定義⁴

○レファレンス

利用者の情報探索行動を、図書館職員が直接的・間接的に支援するサービスのこと。利用者の質問や依頼に応じて情報・資料そのもの、あるいは探索方法等を提示する方法や、図書館利用ガイダンス、情報探索法講習会等の直接的な支援とレファレンス資料の収集や、頻度の多い質問に対して予め書誌・索引等のレファレンスツールを作成しておく等の間接的支援とがある。

2.3. 専門事典の定義⁵

○レファレンスサービス reference service

何らかの情報あるいは資料を求めている図書館利用者に対して、図書館員が仲介的立場から、求められている情報あるいは資料を提供ないし提示することによって援助すること、およびそれにかかわる諸業務。図書館における情報サービスのうち、人的で個別的な援助形式をとるものをいい、図書館利用者に対する利用案内（指導）と情報あるいは資料の提供との二つに大別される。

2.4. 一般的なレファレンス・サービスの考え方

以上を総合すると、レファレンス・サービスとは以下のようにまとめられる。

- (1) 図書館利用者が必要としている情報や資料を、図書館職員が提供するサービス
- (2) 図書館利用者一人一人個別の話題に対して、解決に向けた協力をする相談サービス
- (3) 図書館利用者が自分で個々の課題を解決できるよう技術を教える、利用指導サービス
- (4) 各々の課題解決を目指す図書館利用者にとって、参考になる資料を予め整備する業務

⁴ 文部科学省科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会「大学図書館の整備について（審議のまとめ）－変革する大学にあって求められる大学図書館像－」 2010.12. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/attach/1301655.htm (参照 2017-11-27).

⁵ 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編『図書館情報学用語辞典』第4版、丸善出版、2013、p.255.

3. ランガナタンとレファレンス・サービスに言及する著作について

3.1. S.R.ランガナタン(Shiyali Ramamlita Ranganathan,1892-1972)とは？

インド・マドラス州（現タミルナドゥ州）出身の数学者・図書館学者である。1931年に『図書館の五法則』を発表するほか、コロソ分類法(Colon Classification)等独特の考案をしたことで、世界的にも著名である。

3.2. レファレンス・サービスに言及する S.R.ランガナタンの著作について

一冊全体で解説したものから部分的に扱ったものまで、複数存在する。

【一冊全体のもの】

- S.R. Ranganathan, K.M. Sivaraman, C. Sundaram, *Reference Service and Bibliography with a foreword by Sir Maurice Linford Gwyer* (Madras Library Association Publications, 9), Madras Library Association; E. Goldston, 1940-1941, 2 vols. (v.1: 624 p., v.2: 511 p.).
- Ranganathan, *Reference Service*, 2nd.ed. Asia Publishing House, 1961, 432 p.

【部分的に扱っているもの】

- Ranganathan; with a foreword by Sir P.S. Sivaswami Aiyer ; and an introduction by W. C. Berwick Sayers, *The Five Laws of Library Science*. (Madras Library Association Publications, 2), Madras Library Association, Goldston, 1931, pp.291-295, pp.312-315, pp.359-364.
- Ranganathan, *Classification and Communication*, [rep.ed.], Sarada Ranganathan Endowment for Library Science, c1973, [1951], pp.215-243.
- Ranganathan ed. *Depth Classification and Reference Service & Reference Material : papers for discussion at the tenth All-India Library Conference, Hyderabad, 1-4 June 1953*, Indian Library Association, 1953, pp.12-26, pp.256-281, pp.385-395.
- Ranganathan, *Library Administration*, 2nd ed. (Ranganathan series in library science, 3), Asia Publishing House, 1959, pp.353-363.
- Ranganathan; assisted by P. Jayarajan, *New Education and School Library* (Sarada Ranganathan Endowment for Library Science series, 4), Ess Publications for Sarada Ranganathan Endowment for Library Science, 2006, c1973, [1961], pp.305-324.

- Ranganathan, *Library Manual: for library authorities, librarians and honorary library workers*, 2nd ed. [repr. ed.] (Ranganathan series in library science, 6. Madras Library Association publication series, 25), Asia Publishing House, 1962, pp.103-135.
- Ranganathan, *The Five Laws of Library Science*, 2nd ed., Asia Publishing House, c1963, [1957], pp.75-78, pp.245-251, pp.268-270, pp.305-309, pp.372-378, pp.383-384, 翻訳: S.R.ランガナタン著; 渡辺信一, 深井耀子, 渋谷義行共訳 『図書館学の五法則』 日本図書館協会, 1981, pp.74-78, pp.227-233, pp.249-251, pp.284-288, pp.350-356, p.362.
- Ranganathan, *Documentation: Genesis and Development*. (Sarada Ranganathan Endowment for Library Science series, 3). Vikas Pub. House, 1973, pp.68-79.

以上の著作を、時代ごとに検討する。

4. 各年代のレファレンス・サービス論について

4.1. 1930~40年代まで

1924年にマドラス大学図書館に勤めるようになったランガナタンは、1931年の『五法則』(初版)を皮切りに、数々の著作を発表し始める。ここでは、この時期の作品を確認する。

4.1.1. The Five Laws of Library Science (1931)

この著作では、レファレンス・ワーク(Reference Work)と示される。「第1法則: 図書は利用するものである」の指示から、図書館員は利用者に対して、その人その人の関心と要求を満たすような個人的サービス(personal service)を行うべきであると述べる。「第2法則: すべての読者にその人の本を」の達成のために、それぞれの利用者が必要とする本へ至ることを積極的に援助するレファレンス・ワークの重要性が示される。そのために図書館員は利用者と本を知悉せねばならない、とも述べる。次に「第3法則: すべての図書にその読者を」の精神から、自分からアピールできない本の代わりに「本と人とを結びつける」仕事を図書館員が行わねばならないことを訴える。そして「第4法則: 読者の時間を節約せよ」に従い、図書館員の個人的サービスによって、利用者が探している本を可能な限り時間を節約して提供せねばならない、としている。

またレファレンス・ワークの部門を、次の2つに分けている。

- ・即答的レファレンス・ワーク部門(Ready Reference Work)
- ・レファレンス専門部門(Reference Work Proper)

4.1.2. Reference Service and Bibliography (1940-1941)

ランガナタンがマドラス大学図書館勤務時代に、同図書館のレファレンス・ライブラリアンである C.Sundaram (主に Vol.1 の Part1-2 を担当) と同じく分類担当である K.M.Sivaraman (主に Vol.2 を担当) と共著したもので、マドラス図書館協会から出版された。全体構成は2巻構成となっており、Vol.1 が理論書、Vol.2 が参考図書のリストになっている。この図書のタイトルではすでに“Reference Work”ではなく“Reference Service”という言葉が使われている。内容の構成は以下の通りである。

Vol.1(1940): 理論 (Theory)

Part 1 レファレンス・サービス (Reference Service)

- Chap.11 レファレンス・サービスの起源 (Genesis of reference service)
- Chap.12 初心者への手ほどき (Initiation of freshmen)
- Chap.13 一般的利用者への一般的なサービス (General help to general readers)

Part 2 即時的レファレンス・サービス (Ready Reference Service)

- Chap. 21 即時的レファレンス・サービスとは何か? (What?)
- Chap. 22 (同上) は何故行うか? (Why?)
- Chap. 23 (同上) は如何に行うか? (How?)

Part 3 調査レファレンス・サービス (Long Range Reference Service)

- Chap. 31 長期的な調査を要するレファレンス・サービスとは何か? (What?)
- Chap. 32 (同上) は何故行うか? (Why?)
- Chap. 33 (同上) は如何に行うか? (How?)
- Chap. 34 実例 (Illustrative actualities)
- Chap. 35 私を探して (Find me out)

Part 4 書誌 (Bibliography)

- Chap. 40 書誌の階層 (Classes of bibliography)
- Chap. 41 図書販売カタログ (Consumer's bibliographies)

- Chap. 42 販売業者（主題）の書誌 (Distributors' (thought) bibliographies)
- Chap. 43 販売業者（物質としての）の書誌 (Distributors' (material) bibliographies)
- Chap. 44 製作者（物質としての）の書誌 (Producers' (material) bibliographies)
- Chap. 45 著者の書誌 (Author bibliographies)
- Chap. 46 主題の書誌 (Subject bibliographies)
- 索引

Vol.2(1941): 参考図書と書誌の書誌 (Bibliography of Reference Books and Bibliographies)

- Chap. 51 序言と主題の順序 (Introduction and schedule of classes)
- Chap. 52 参考図書と書誌の分類書誌 (Classified bibliography of reference books and bibliographies)
- Chap. 53 書誌のアルファベット順索引 (Alphabetical index to the bibliography)

4.2. 1950 年代

ランガナタンは、1945年にマドラス大学を退職し、バラナス・ヒンドゥー大学に奉職後、1947年にはデリー大学に移り、図書館学の博士課程の創立に尽力する。1950年代はアメリカに渡るほかスイス・チューリッヒに居を構える等外遊が多く、国際的な活動が多い時期である。後半にはこれまでの著作の改版が次々に刊行される。

4.2.1. Classification and Communication (1951)

当著作は、Part 1 が図書の分類についてであり、分析合成型の分類が、物の本質をより表現しやすい方式であると主張する内容である。Part 2 が人と人とのコミュニケーションとそれを介した協働についてである。Part 3 は、分類の未来というタイトルで、コミュニケーションにおける分類の諸問題を論じている。

この著作におけるレファレンス・サービスは、図1のように情報の発信者（本や論文の著者が想定されている。）が発した記録や情報を、それらを必要とする受信者（読者）に届く過程を想定し、受信者が求めるものに突き当た

ることができるよう、人的にサポートするものとして説明される。⁶

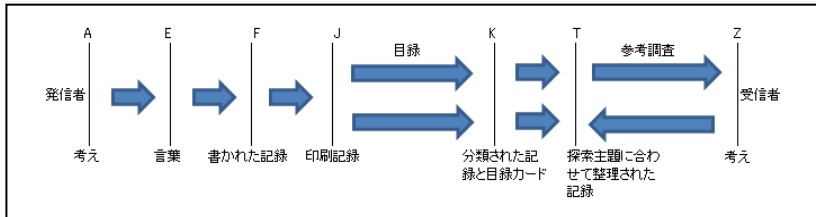


図1 発信者の情報が目録・分類・参考調査を介して受信者に伝達されるまでの経過

このモデルのJからTまでは、印刷記録(Printed Record 注・つまり図書など)が目録・分類作業を経て、主題ごとに整理された状態を示している。TからZにおいて受信者は、レファレンス・サービスの力を借りて、必要とする印刷記録にたどり着くのである。

4.2.2. Depth Classification and Reference Service & Reference Material(1953)

当著作は、1953年6月1～4日にインドのハイデラバードで開催された第10回全インド図書館大会(All-India Library Conference)の発表集である。この講演の内容は、次の通りである。最初にランガナタンは、図書の単位よりも深いレベル(記事・論文・章など)で内容を目録化し、分類をすることで、より人と情報が結び付きやすくなることについて、様々な発表者が発表を行っている。

当著作でランガナタンは、レファレンス・サービスと参考図書について基調講演をしている。図書を様々な思考が集約されたマクロ・ドキュメント(Macro Document)とし、これに対して、論文、記事、章、段落といった細かい単位をマイクロ・ドキュメント(Micro Document)と定義する。人々の好奇心を満たすためには、マクロ・ドキュメントのレベルでの検索に留まらず、より細部のマイクロ・ドキュメント一つ一つまで探すことが可能になることで、真に好奇心を満たすことができる。そのため、この細かい単位で図書の内容を組織化し、それを個人的にナビゲートすることがレファレンス・サー

⁶ 拙稿「S.R.ランガナタンのコミュニケーション論について」『教育思想』44, 2017, p.46.

ビスの目的であり、人類の協働研究を促進させることになるとする。そしてその働きは、創造を助ける者という意味のサンスクリット語、Parjanya に値する働きで、生成を司る Varuna 神（漢語で水天）に当たると説明している。

4.2.3. The Five Laws of Library Science, 2nd.ed. (1957)

1931年の初版と比べて、

- ・レファレンス・ワーク→レファレンス・サービスへの変更
- ・レファレンス専門部門→調査レファレンス

の用語 2 点が、変更されている。これらは、前掲の Reference Service and Bibliography (1940-1941)で扱われた用語をそのまま継承している。

また、加筆された 8 章においては、

- ・第 3 法則とドキュメンテーション：資料の細部まで利用者につなぐ。
- ・第 4 法則に基づき、他の業務の時間を節約する。そしてレファレンス・サービスへの注力を大きくする。
- ・レファレンス・サービスが図書館の諸業務の主軸にして、最高峰にあること。

といった点が加えられている。

4.2.4. Library Administration, 2nd ed.(1959)

当著作は、図書館の管理手法について具体的に示したものである。レファレンス・サービスに関する内容としては、レファレンス部門の業務内容について示している箇所がある。内容は、即答的レファレンス、調査的レファレンス、レファレンス情報源の整備、安全管理、といった実務的なものが続く。

4.3. 1960 年代

1950年代後半から引き続き、改版の刊行が続く。1960年代後半には、健康を害し、著作が減少する。

4.3.1. Reference Service, 2nd.ed.(1961)

この著作は、Reference Service and Bibliography(1940-41)の内、レファレンス・サービスの理論が示された Part1 のみを切り分けて、大幅に加筆したも

のである（加筆内容は以下を参照）。レファレンス・サービスの基本理論や実践例のほか、ランガナタンとレファレンス・サービスとの出会いや、各所に散りばめられている 167 個ものケーススタディ、そして、ヴェーダ、ラーマヤーナ、オーロビンドといったインド古典や思想家が登場する章「Part E. レファレンス・サービスのとらえがたい深さ(Mystic Picture of Reference Service)」がある。

内容構成は以下の通りである。

Part A 序論(Introduction)

→加筆された章

Part B レファレンス・サービスの出現 (Emergence of Reference Service)

→第 1 章「レファレンス・サービスと図書館学の法則(Reference Service and the Laws of Library Science)」の加筆

Part C 初心者への手ほどき (Initiation of Freshman)

→第 5 章「学校図書館での手ほどき(Initiation in School Library)」の加筆

Part D 一般的利用者への一般的なサービス (General help to general readers)

Part E レファレンス・サービスのとらえがたい深さ (Mystic Picture of Reference Service)

→第 4 章「オーロビンドの『聖なる母』からの光(Light from the “Mother” of Aurobind)」以外の章は、全て加筆された章

Part F 即時的レファレンス・サービス (Ready Reference Service)

Part G 私を探して (Find me out)

Part H 参考図書 (Reference Book)

→第 8 章「参考図書の構造と内容(Structure and Contents of a Reference Book)」の加筆

Part J 調査レファレンス・サービス (Long Range Reference Service)

→第 6 章「調査レファレンス・サービスへの統合(Assimilation in Long Range Reference Service)」の加筆

→第 7 章「書誌の構造と内容(Structure and Contents of Bibliography)」の加筆

Part K 実例 (Illustrative Actualities)

→第 8 章「すぐには見返りの無い無私の喜び(Deferred Ego-less Joy)」

の加筆

次に、主な内容を示す。

(1) レファレンス・サービスの定義

ランガナタンはこの著作で「レファレンス・サービス」を以下の様に定義している。

10. レファレンス・サービスの定義

レファレンス・サービスとは利用者とその人の文献を、人の力で結びつけるものである。その人の文献とは、その時その時その利用者が必要としているものを指す。そしてその利用者が必要としそうな文献も意味する。さらに、結び付けるに当たり、いかなる無駄な時間をも排さねばならない。それらの遂行は、利用者と親しく接することで、必要とするものを正しく理解しない限り不可能である。この理解のため、図書館員と利用者間に親密なコミュニケーションが確立されなければならない。利用者が最初に相談に来たときから満足するまで、図書館員は利用者の願望を理解し、把握し続けなければならない。それゆえ、レファレンス・サービスとは本質的に、個人的なサービスなのである。⁷

ここでは、利用者と利用者が必要としている文献や情報を、人の手で提供し結びつける個人的サービスである、としている。また個人的なサービスについては、図書館の蔵書は、1冊1冊がそれぞれ独立した存在で個性があり、1人1人の読者もまた独特の存在である、それぞれの個性や特殊性を踏まえて個人的に結びつけるサービスを行わねばならない、と説明をする。

(2) レファレンス・ライブラリアンとは

レファレンス・サービスに携わる図書館員をレファレンス・ライブラリアンという。ランガナタンは、レファレンス・ライブラリアンについて以下の様な定義を行っている。

102. レファレンス・ライブラリアンの定義

利用者にレファレンス・サービスを行う瞬間、その図書館員はレファレンス・ライブラリアンなのである。図書館員の毎日の中で最も幸福な瞬間は、レ

⁷ S.R. Ranganathan, *Reference Service*, 2nd ed., Asia Publishing House, c1961, p.53.

以下当著作の邦訳は、齋藤泰則著 『利用者志向のレファレンスサービス：その原理と方法』（ネットワーク時代の図書館情報学）勉誠出版、2009、pp.16-17.や竹内愨訳 *Reference Service by Dr. S.R. Ranganathan Edition 2(1961) Part A-C* 未定稿（予備版）及び *Part C-F* 未定稿（予備版2）を参考にさせて頂いた。

ファレンス・サービスを行う瞬間なのである。レファレンス・ライブラリアンの最上の喜びは、レファレンス・サービスを行った利用者の役に立ち、彼が満面の笑みを浮かべた時なのである。⁸

以上から、レファレンス・サービスを「担当」する者がレファレンス・ライブラリアンということではなく、課題解決を目指す利用者、レファレンス・サービスを施す図書館員は全て「レファレンス・ライブラリアン」なのである。また次の様な説明も行っている。

122. 文献探索の旅

(前略) 全ての利用者の探し求める文献を的確に探し当てるために、レファレンス・ライブラリアンは、利用者の文献探索の旅に同行するべきである。レファレンス・ライブラリアンの役割は、教師や指導者のそれとは異なる。遙かに違う。アドバイザーとも違う。これらと同じと見なすことは、おこがまし過ぎる。利用者の自尊心を奪う結果となる。そのような言葉を使うと、気分を害する利用者も居るかもしれない。そのような訳で、イギリスの図書館員がレファレンス・サービスのことを「利用者助言サービス(readers' advisory service)」と呼ぶのを支持しないのである。レファレンス・ライブラリアンは、文献探索をする利用者のただの仲間(companion)なのである。⁹

レファレンス・ライブラリアンは、教師や指導者のように上から教授を行い、引っ張るようなものではなく、また助言を与えるアドバイザーですらない。文献の探索を協働して行い、利用者に随伴し一緒に歩むような立場である、とランガナタンは主張するのである。

(3) 人的サービスの必要性：複雑にして数多い図書館の目的

複雑な図書館の目的(purpose)として、次の12個の目標を列挙している。¹⁰

- ① 社会の記録を提供する。
- ② 表現(expressed thought)は全て集め、組織化し、保存し、社会化して、提供する。その表現とは、原稿、本、雑誌、ドキュメント、そしてメモや様々な連絡手段として書かれたものことである。
- ③ 前世代から後の世代に知識を伝達する。
- ④ 集めた知識を世代間に伝え、さらに知識を追加するようにする。
- ⑤ 現代の知識をさらに発展させるようにする。そのために、無目的の原因になることで繰り返される、意図しない無駄を省くことで、人々の研究の力を浪費させないようにする。

⁸ Ibid. p.54.

⁹ Ibid. pp.55-56.

¹⁰ Ibid. pp.171-172.

- ⑥文献調査に割く時間を減らし、本来の研究に時間を投入できるよう、研究時間を節約させる。
- ⑦絶え間ない自己教育を助ける。
- ⑧全ての利用出来る記録情報を協同で集める。特に参考図書や利用者が求める情報を集める。
- ⑨かつてなく増加した人類が、快適に暮らし、いかなる貧困からも自由であるため、人々の経済力が増すようにする。
- ⑩個人、共同体、国家が、平和に共存し、寛容しあい、協力することを理解するよう促し、働きかける。
- ⑪図書、絵、レコード、等々の資料を無料で貸し出すことによって余暇の充実を促す。
- ⑫人類の一員であり全体である、という魂の覚醒(spiritual awakening)の機会を増やすようにする。

以上の様に図書館には多くの目的があるため、利用者は、図書館の様々な機能を、自分の目標に沿って活用することが非常に困難である。そこで、個人的サービスであるレファレンス・サービスで対応する必要があることを主張する。多岐にわたる図書館の機能と同じく多岐に渡る利用者の願望を、人的につなぐことが必要なのである。

(4) レファレンス・サービスのとらえがたい深さ

この図書では、レファレンス・サービスを知的に分析・解釈して論述している。(中略)しかし細かく分けて理解することは、かえって全体的な本質から話をそらしてしまう恐れがある。全くもってレファレンス・サービスは言葉では言い尽くせない。その細部は無尽蔵である。その香りは筆舌に尽くせないし、触れることができない。知性によって導いたり、発展させたりすることを超えている。¹¹

とランガナタンは述べ、言葉ではなく詩等の神秘表現によるレファレンス・サービスの本質の伝達を試みる。以下登場するのは、インド古典やヒンドゥー思想家の言葉である。

①ヴェーダからの光¹²

図書館の利用者は、お前よりも上の存在である。
お前の全ての注意と誠意をもって奉仕をしろ。
お前の持つ力の全てを挙げて奉仕をしろ。

¹¹ Ibid. p.174.

¹² Ibid. p.177.

名声や自我から自由となり、全ての慎ましさを発揮して、奉仕をしる。
「五法則」に反しない全ての方法で、奉仕をしる。
奉仕を行うため、知識と情報を最大限に身につける。

これは、レファレンス・サービスをタイトティリヤ・ウパニシャッドの句に例えたものであるが、利用者が必要としているものを探すにあたり、全力で奉仕する精神とそのため能力養成を行うことを主張している。

②ヴァルミキ¹³からの光¹⁴

おおお！完全なる力を持つ者よ！
来たれ、来たれ、ただちに、そして聴け！
おおお！全て望むものを与える牛よ！
わが苦行のすべての結果よ。
人々が望むものを振りかけろ！
一人一人がそれぞれ望むもの全てを！
六種の味（甘、酢、塩、辛、苦、淡）の全てを使って。

この節でレファレンス・ライブラリアンとは、ラーマヤーナの中のシャトルグナ(Satrugna, 利己心克服の象徴)、ラクシュマナ(Lakshmana, 結果と見返りを目的としない奉仕の象徴)、バラタ(Bharata, 忍耐・沈黙・重荷の象徴)、ラーマ(Rama, 愛想・魅力・接しやすさ・最上の慎ましさと能力の象徴)の4相を持つ、としている。つまりここでは、結果を目的とせず、見返りを求めない全力で奉仕する精神で、利用者が望むものに応えることを、前節と同じように主張しているのである。

¹³ ヴァルミキ(Valmiki, 紀元前3世紀頃?)

『ラーマヤーナ(Ramayana)』の著者とされている。

¹⁴ Ranganathan, *Reference Service*, 2nd ed., c1961, p.178.

③オーロピンド『聖なる母』¹⁵からの光¹⁶

ここでは、オーロピンド『聖なる母』(1928)の内容に仮託し、レファレンス・ライブラリアンの本質について、ヒンドゥー的な解説が示される。なおこの内容は初版である Reference Service and Bibliography の pp.129-135 に示された内容であり、初版巻頭にオーロピンドへの謝辞が記されている。初版刊行時の 1940 年当時、オーロピンドは健在であったため特に謝辞が書かれたが、オーロピンドは 1950 年に没したためか、第 2 版に謝辞は無い。

ここでの説明は次のようなものである。まず図書館の 3 要素である「図書」「利用者」「レファレンス・ライブラリアン」をオーロピンドの思想に従い、以下の様に定義づける。

- ・ 図書：プルシャ = Purusha: Akshara Brahma (神) の文字形態、神聖にして計り知れないもの
- ・ 利用者：マヌシャ プラクリティ = Manusha Prakriti : 自然存在の象徴としての人、プルシャにより化育される自然存在
- ・ レファレンス・ライブラリアン：シャクティ = Sakti : 聖なる母の力にして、プルシャがプラクリティに下降するための力、また、プラクリティがプルシャに昇華するための力

図書 (プルシャ) は、活性化した利用者 (プラクリティ) による充足を求め、利用者 (プラクリティ) は、図書 (プルシャ) の実現で完成する。そのためレファレンス・ライブラリアンは、図書と利用者を、結果や見返りを期待せず自己犠牲の気持ちで結びつけるのである。次にこのシャクティは、インドの伝統的な神である、智慧を表すマヘーシュワリ (Maheswari)、強さを表

¹⁵ オーロピンド・ゴーシュ (Sri Aurobindo Ghose, 1872-1950)

近代インドの宗教思想家。(中略) ケンブリッジ大学を卒業後、反英闘争を経て、ヒンドゥー教の指導者となり思索と教育に専念した。(中略) 彼は、インド思想こそが世界を導き人類を救う思想であると力説し、また悟りによって得られる絶対者の力を身につけた超人の出現を待望する論を述べた。主著に『聖なる生活』(1949)がある。

参照『日本大百科全書(ニッポニカ)』(JapanKnowledge Lib 所収) <http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000042314>, (参照: 2017-11-28)。

『聖なる母』とは、1928 年に刊行されたオーロピンドの著作“Mother”のことである。

¹⁶ Ranganathan, *Reference Service*, 2nd ed., c1961, pp.181-184.

すマハーカーリー(Mahakali)、調和を表すマハーラクシュミ(Mahalaksmi)、そして完全性を表しているマハーサラスヴァティ(Mahasaraswati)、の4面を持つ。レファレンス・ライブラリアンは、この4相の完成により、シャクティの一部となることで歓喜(Ananda)に至り、最高の存在から溢れ出たものとなる、としている。

以上の説明はつまり、利用者と図書との間柄を往還的に繋ぐ者としてのレファレンス・ライブラリアンのイメージを示している。図書から摂取した知識を基に利用者がまた新たな表現物を産み出し、その循環をレファレンス・ライブラリアンが推進者として取り持つことを示すのである。

④サンスクリットからの光¹⁷

図書や図書館にまつわるサンスクリット語由来の言葉¹⁸を紹介し、その意味の深さを検討している。

・ グランターラヤ(Granthalaya)

グラント=表出された思考や作品(expressed thought or work)

+

ラヤ→アーラヤ(alaya)=完全な統合

=図書館

このグランターラヤは、意味論的に次の内容を示す。

- ・ 記憶を豊かにする
- ・ 感情を高める
- ・ 知性を刺激する
- ・ 知識を増やす
- ・ 直観を解放する

また、これらの目標の究極の実現を目指し、精神とグラントとの統合を行うもの、を意味する。

¹⁷ Ibid. pp.185-186.

¹⁸ 原文では、サンスクリットの表記について不統一な箇所がある。なるべく原文の形に沿うように一部修正を行ったが、一々長音などを表記しないこととする。

- ・ グランターライ (Granthalayi)

上記5つの目標の成就を目指して、精神とグランタとを統合する人のことを言う。具体的には図書館員を指すが単なるライブラリアンよりも意味深い。

- ・ プスタカラヤ (Pustakalaya)

上のグランタが抽象的な「思考」であるのに対し、物理的な図書を示す言葉であるプスタカを使った「図書館」を指し示す語である。図書の保管庫といった意味になる。

- ・ プスタカーラヤ=パラ (Pustakalaya-Para)

本の管理人程度の意味

- ・ アヌ・ラヤ・セーヴィ (Anu-Laya-Sevi)

レファレンス・ライブラリアンを指す。利用者とともに、人の生み出した作品：グランタを統合する働きをする者である。「アヌ」という接頭辞は、「利用者と一緒に」「人それぞれの個性に敬意を払って」ということを強調するものである。レファレンス・サービスではこの2点が重要であることを主張する。

以上では、図書館が単なる図書の保存庫ではなく人々の精神の表出物を統合する存在であり、そして図書館員が同じく単なる図書の管理人ではなく、人々の精神の統合を成就するよう働く者としてのイメージを示している。

4.3.2. New Education and School Library, 2nd.ed. (1961)

この著作は、新教育の考えに基づいた学校図書館に関する図書である。当著作では学校図書館でのレファレンス・サービスについて、数章を使って解説しているが、学校図書館のレファレンス・サービスに限らず、社会や人間形成といった観点で、より大局的なレファレンス・サービス観が述べられている。

学校図書館におけるレファレンス・サービスについては、生徒に図書館の利活用方法を手ほどきすること、生徒個人に対するサービス、学級へのサービス、の3つの説明があるのみである。

次にレファレンス・サービスの本質については、図書館サービスの最終目的である「五法則」を満たすことを目指し、この目標達成のために読者と本とを個人的なサービスによって適切に結びつけることが目的であるとする。

その目的に基づき、社会や人間形成の話といった大局的な話に入る。

社会の物質的な豊かさを生み出すために、人の資質の耕作(cultivation of human resources)つまり人的資源の充実がまず必要である。ではその人的資源の充実は何によって生み出されるかについてだが、これはヴェーダの「人(man)とは精神(mind)」という語句に基づき、人の精神の耕作(cultivation of mind)によるものである、としている。この精神とは、次の五要素(表1)によって構成される。

表1 精神の五要素

精神	記憶(memory)
	感情(emotion)
	吸収する知力(absorbing intellect)
	創造する知力(creative intellect)
	昇華した感情(sublimated emotion)

図書の種類とこの五要素を対比させると、表2の様になるとする。

表2 精神の五要素に対応する図書の種類

記憶	外部記憶装置である参考図書
感情	娯楽図書 例：伝記、フィクション、旅行
吸収する知力	通常の図書 普通の読者に必要なもの
創造する知力	論文や専門書、学術雑誌 専門家が必要とするもの
昇華した感情	独創的で影響力が大きい図書(seminal books)、文学や宗教

これらの図書を、図書館は肥料の様に人々の精神に与え、精神、そして人の資質の成長を促す。その際、レファレンス・サービスが人と図書を適切に結びつけることで、この働きを果たすという。その様子が図2である。

CHAPTER TK

CULTIVATION OF MENTAL RESOURCES OF A COMMUNITY: SCHEMATIC REPRESENTATION

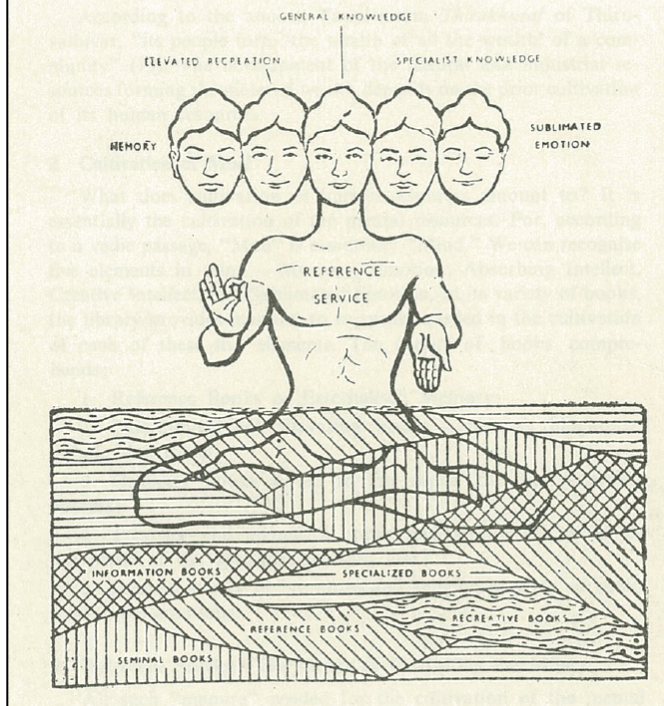


図2 精神の耕作 概念図¹⁹

当図を読み解くと、結跏趺坐し印を結んでいる人物は、精神の耕作を行う様を植物に似せて現している。大地から肥料として養分を吸い上げ、葉に見たてた頭部を育成するのである。地中深くには様々な本の地層（情動的な図書、専門書、参考図書、娯楽図書、独創的で影響力が大きい図書）が示され

¹⁹ S.R. Ranganathan.; assisted by P. Jayarajan. *New Education and School Library*. (Sarada Ranganathan Endowment for Library Science series, 4). Ess Publications for Sarada Ranganathan Endowment for Library Science, 2006, c1973, [1961], p.322.

ている。結跏は根のようにこれらの智慧を吸い上げ、胴体にあるレファレンス・サービスがこの流れを整理し、対応した精神のもとに適切な養分を導く。頭部には五種の精神要素（記憶、感情、吸収する知力、創造する知力、昇華した感情）²⁰を示す五面があり、吸い上げられた智慧の力で葉の様に繁茂するというものである。ランガナタンはこのレファレンス・サービスによる精神の耕作を子どものうちに、それも早く開始すればするほど良い、と述べており、学校図書館のレファレンス・サービスが導く精神育成の重要性を提唱している。

そしてさらに、図書館の様々な業務の中でレファレンス・サービスこそ中心にある重要な業務であることを車輪に例えた図3によって示される。

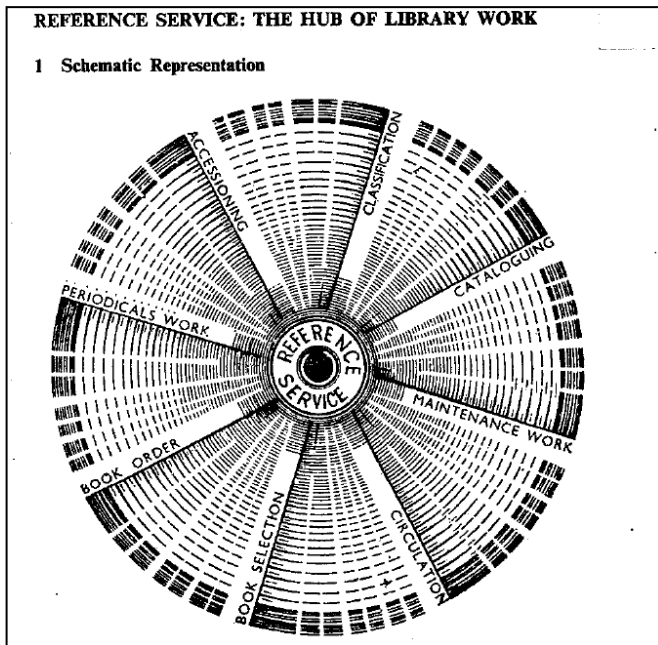


図3 図書館の様々な業務の中心に位置するレファレンス・サービス²¹

²⁰ 表1の五要素と図2の五面は、異なる用語があるものの対応していると考えられる。感情(emotion)→左から2番目の面(elevated perception)、吸収する知力(absorbing intellect)→中央の面(general knowledge)、創造する知力(creative intellect)→右から2番目の面(specialist knowledge)

²¹ Ranganathan. *New Education and School Library*, 1961, p.323.

車輪状の円の中心核には、レファレンス・サービスがある。分類、目録、選書、受入といった図書館の様々な業務は、全てレファレンス・サービスという車軸に繋がっており、それを中心に回転していることが、象徴的に示されるのである。

4.3.3. Library Manual, 2nd.ed. (1962)

当著作は、図書館で働く現場の者のためのマニュアルであり、レファレンス・サービスを取り扱っている Part 3 は、Reference Service(1961)の要約である。内容は、レファレンス・サービスの理論、現場での利用者についての対応と心構え、不審な利用者・違反者に対する考え方、苛立ちや心傷、それらを癒すこの業務の喜び、業務の記録を取り、整理しておくこと、といった具体的な業務の話である。

4.4. 1970 年代

ランガナタン自身は 1972 年 9 月に逝去するが、死後に刊行された著作もある。

ODocumentation: Genesis and Development(1973)

この著作は、ランガナタンの晩年 1970 年に若い図書館員へ行った講話をまとめたものである。当著作では、レファレンス・サービスが進化したものを、ドキュメンテーション・サービスと位置付けており、両者を同質のものとして考えると説明している。²²

ランガナタンは、この著作においてもドキュメンテーション・サービス(=レファレンス・サービス)こそ図書館業務の最高善(Summum Bonum)にして、全ての要素の中心にあるものと位置付ける。そして教育との関係で次の様に説明する。

私は、教育の専門職として働く間、現場の実践から次のことを学んだ。

1. 教育とは、結局自己教育であるべきこと
2. 好奇心は自己教育の原動力となること
3. 教師の基本的な役割は、生徒の好奇心を喚起すること
4. 好奇心は、生徒一人一人によって異なること
5. 自己教育に必要な好奇心は、いわゆる「教育不可能な生徒(Un-educable)」や

²² S.R.Ranganathan. *Documentation: Genesis and Development*. (Sarada Ranganathan Endowment for Library Science series, 3). Vikas Pub. House, 1973, p.30.

「愚鈍な生徒(Dull)」であっても喚起可能であること

これは偉大な物理学者アルバート・アインシュタインの言葉である「天与の好奇心(Divine Curiosity)」の意味を理解させる経験であった。私は、図書館の中心(Hub) つまりここでは「レファレンス・サービス」＝「ドキュメンテーション・サービス」が、一人一人の好奇心を満たすことができるべきである、と考えるのである。²³

つまり、教育とは、人それぞれの異なる好奇心が掻き立てる「自己教育」に他ならないと主張する。その好奇心を教育現場で教師が喚起し、喚起された探求心を満たすのが図書館である。そこで重要となるのがレファレンス・ライブラリアンが行う、レファレンス・サービスなのである。ランガナタンの晩年の考えでは、1960年代よりもさらに「レファレンス・サービス」＝「ドキュメンテーション・サービス」を「教育」という大枠の中で位置付けていたことが、ここから見て取れる。

5. ランガナタンのレファレンス・サービス観について

以上、ランガナタンの著作から、年代ごとにレファレンス・サービスについての主張を概観してきた。当章では、ランガナタンの考えの変遷をふまえ、レファレンス・サービス観をまとめる。

5.1. ランガナタンのレファレンス・サービス観の変遷

第一に初期の作品、つまり *The Five Laws of Library Science* (1931)では、レファレンス・ワークという言葉を使用していたが、9年後に刊行された *Reference Service and Bibliography* (1940-1941)以降、レファレンス・サービスという言葉に一貫して統一されている。Samuel Rothsteinによると、この「レファレンス・ワーク」という言葉は、1891年に北米で刊行された *Library Journal* で使われるようになった。²⁴当初は図書館利用者の質問や相談に応える業務として、「レファレンス・ワーク」という言葉を使っていた。しかし徐々に、図書館のサービスの一つを示す語として「レファレンス・サービス」という言葉が使用されて来たと考えられる。現在でも、主にレファレンスの全体概要を示す場合は「レファレンス・サービス」であり、個々の業務や技術においては「レファレンス・ワーク」という言葉が使用される。

²³ Ibid. p.75.

²⁴ サミュエル・ローススティーン著；常盤繁 [ほか] 共訳『レファレンス・サービスの発達』日本図書館協会、1979, p.7.

ランガナタンは、Reference Service and Bibliography(1940-41)以降、「レファレンス・ワーク」という用語を使用しなくなることについては、現場の仕事やテクニカルな話題というよりも、利用者からの相談に対して、どのような奉仕を展開するべきか、そしてどのような背景があるか、ということを一に考える感覚に移行したことと、テクニカルな話から理念的な話へ推移していったことの表れではないであろうか。

そしてランガナタンにとってレファレンス・サービスは、図書館業務の最高峰にあり、司令塔に位置し、全ての業務の成果がここに反映するものになっていく。選書や受入、分類や目録といった資料管理も、全てはレファレンスが円滑に行われることを目標に業務を組み立てるようになる。また図書館業務の効率化・省力化を進め、空いた時間を利用者のレファレンス対応に時間を充当することまで主張するのである。

次に、第二次世界大戦後、ランガナタン自身が「ドキュメンテーション」に関心が推移していったことに応じて、「レファレンス・サービス」自体も「ドキュメンテーション・サービス」へと考えが進んで行ったことが挙げられる。これは、科学技術研究を支える学術文献流通を活性化させる動きと平行して、人各々の好奇心は、細かい単位で情報を検索することができないと満たせないで、図書や雑誌の細部まで検索可能にすべきである、という考えに進んで行ったと考えられる。

5.2. ランガナタンにおけるレファレンス・サービスとは何か？

以上をふまえてランガナタンにおけるレファレンス・サービスの概念をまとめると以下の通りである。

- ・ 各々の利用者の興味関心に従って奉仕する、個人サービスであること
- ・ 複雑にして多様な機能を持つ図書館を人の力で導く、人的サービスであること
- ・ 図書（情報）とそれを必要としている利用者を結びつける働きをすること
- ・ 上から教えるのではなく、一緒に協働すること
- ・ 即答レファレンスと調査レファレンスがあること
- ・ 全ての業務の上にあって、図書館を総合し、図書館の力を最大限に発揮させる役目を持つこと
- ・ 総合案内的な要素から研究調査相談までの領域を含む
 - ・ 総合案内
 - ・ 利用指導（初級）

- ・即答レファレンス
- ・利用指導（上級）
- ・調査レファレンス
- ・自己犠牲の精神をもつこと
- ・結果を目的とせず行為に専心すること
 - シャクティの一部となり、歓喜の境地に
- ・自己教育こそ教育本来の姿であり、それを推進するものが各々の好奇心である。その好奇心を満たすサービスであること

5.3. 定義における特徴

2.4で、一般的なレファレンス・サービスの意味を以下の通りとした。

- (1) 図書館利用者が必要としている情報や資料を、図書館職員が提供するサービス
- (2) 図書館利用者一人一人個別の話題に対して、解決に向けた協力をする相談サービス
- (3) 図書館利用者が自分で個々の主題を解決できるよう技術を教える、利用指導サービス
- (4) 同じく自分で個々の主題を解決できるような資料を、予め整備する業務

以上の 5.2 でまとめた内容と比較すると、もちろん重なる部分が多い。しかし特徴的に考えられるのが、教育の視点である。人々の好奇心を満たすことは、一般的定義の(1)(2)にも示されていると言える。しかし、その背景には自己教育の原動力である好奇心を満たすこと、という役割があり、またそのように営まれる自己教育こそ教育の本来の姿である、という指摘をしていることに、ランガナタンの大きな特徴がある。この自己教育を伴走しながら利用者と図書・情報を結びつけて、人的資源の開発、ひいては人類社会の発展に貢献する、という大きな視点での解釈をしているところが、さらにランガナタンの独特な教育観や宗教観に裏打ちされたところと言えよう。

たしかにランガナタンは、レファレンス・ライブアリアンの定義において「教師」でも「指導者」でもないし「アドバイザー」でもない、と指摘している。あくまでも利用者の「文献探索という技能を持った同行者」というものとしている。そのため一見すると教育の概念から遠のいているように見える。たしかに狭義の教育、つまり直接何かを上から教える、という視点からすれば、その通りである。しかし大局的な視点、つまり広義の教育で考える

と、自己教育の同伴者としての教育者という姿が浮かび上がるのではないかと。

5.4. 教育の視点で見るランガナタンのレファレンス・サービス観

さらに教育の定義から、ランガナタンのレファレンス・サービス観を考える。教育の視点では、レファレンス・サービスの内容に必ず「利用指導サービス」が含まれることが挙げられる。これは図書館の利用に関することや、文献探索についての手法を教えることで、図書館を一層活用できるよう利用者に働きかけるものである。この内容は、技術を利用者に「教える」ということで、教育行為として分かりやすい。これを狭義の意味での教育と考えることとする。

一方、自己教育の伴走者としてあるレファレンス・サービスについても、ランガナタンの解釈から考えると広義の教育を行っている、と言えよう。利用者の好奇心に伴走し、サービスを提供することは、一見コンサルタント・サービスのよう相談・課題解決行為に見える。しかし、この好奇心は利用者自身の自己教育を推進するものであり、それを叶える者としてのレファレンス・ライブラリアンは、大きな視点で広義の教育を行っていると言えるのではないかと。

この点に関して教育の定義からランガナタンのレファレンス・サービス観を再度検討し、内包される教育の要素を考える。

教育とは、他者に対して、彼／彼女の人間形成を利他的な思いからサポートしようとする働きかける営みである。その営みとは、目的と目標を具え、合理的、計画的に行われるという特質をもつ。²⁵

という定義に基づくと、「他者に対して」は、サービス対象である図書館の利用者が想定される。「彼／彼女の人間形成」については、ランガナタンの晩年の「教育＝自己教育論」に基づくと、利用者それぞれの好奇心と一緒に探索した図書等の情報で満たし、自己教育の促進・完遂を、伴走することで「彼／彼女の人間形成」に寄与している。「利他的な思いからサポートしようとする働きかける営み」については、レファレンス・サービスについても疑いがない。

「目的・目標」については、利用者本人が自らの好奇心に基づいて設定する「目的・目標」がある。また、レファレンス・ライブラリアンが利用者インタビューから類推して再設定する「目的・目標」（この再設定時に専門的知

²⁵ 紺野祐，走井洋一，小池孝範，清多英羽，奥井理現「「教育」概念の分析と再構築に関する研究(1)」『秋田大学教育文化学部研究紀要，教育科学』66，2011，pp.25-36.

見や経験からの指導・示唆行為が加わる。)がある。「合理的、計画的に行われるという特質」については、「五法則」の第4法則に基づき、可能な限り時間の無駄を省き、目標を達するという命題がある。

以上を考えると、先に挙げた「教育の定義」に合致する部分が多分にあり、ここでもランガナタンのレファレンス・サービス観には教育の要素が少なからず含まれていると考える。既存のレファレンス・サービス観と比較すると、独特な考えであると言えよう。

6. おわりに

レファレンス・サービスの発展史²⁶を振り返ると、

保守論:利用者自分で必要な情報を探ることができるよう、手段を教えて、
答は教えない。

自由論:必要な情報を、そのまま利用者に提供する。

という大きな2つの流れがあり、長い論争があった。後者は、利用者にとって非常に有益であるが、図書館側の時間と資力を非常に消耗することになる。相談者の増加により、多くのレファレンス・ライブラリアンを必要とするようになるのである。

これらの議論を経た後、レファレンス・サービスの主題専門分化が起きる。専門家を複数雇い、専門的な内容を部門ごとに対応可能にできるよう、図書館は発展していく。

この一連のレファレンス発展史の中で、ランガナタンのレファレンス・サービス観は、とても同レベルで話されているものと思えなかった。「保守論」「自由論」という理論史の立場からは、「結果を目的とせず奉仕に専念せよ。」という考えで「自由論」の立場を取る、とも考えられる。しかし、同じ文脈で考えられているものとも考えられない。専門分化して対応することについても、インドでの図書館発展が欧米程早いものではないので、まずはレファレンス・サービスを全国的に広めること、の課題に専念していたのではないかと考えられる。つまり専門分化し主題別に対応が可能であれば、それに勝るものはないが、まだインドではその域に達していない、という状態であったのではないであろうか。

²⁶ ローススティーン著；常盤繁 [ほか] 共訳『レファレンス・サービスの発達』1979, pp.214-237.

以上を踏まえて、ランガナタンのレファレンス・サービス観は、非常に大局的な個所に位置し、個々のレファレンス・ワークの理論にまで降りてくるようなことが無いように考える。共通して比較できない原因がどこにあるのか、本稿では特定するに至らなかったため、今後の継続課題としたい。

【謝辞】

当研究を行う上で図書館情報大学名誉教授・元日本図書館協会理事長 竹内愨先生の *Reference Service, 2nd ed.* の読書会及びそのテキストには、非常にお世話になりました。また京都大学特定准教授 菊谷竜太先生にはサンسكريット由来の言葉について、数々の有益なアドバイスを頂きました。この場を借りて御礼申し上げます。